

## 地域・在宅看護基礎知識Ⅱ

### 4回目

#### 在宅療養者の 病態に応じた看護



#### 急変や緊急事態

ほとんどの訪問看護ステーションが「24時間緊急時連絡体制」を実施している。しかし、いつでも相談や緊急訪問が出来る体制であるものの、実際には緊急時に速やかに対処することが困難なことが多い。

したがって、家族でも行うことができる応急手当の方法や、緊急時の連絡先を家族や介護者に指導しておく必要がある。

主治医からは、患者や家族・介護者に対して「病態や予測される変化、応急手当などについて十分理解できるように説明してもらう」ことが重要で、その内容についても、看護師が把握しておくことが大切である。

緊急事態が起きた時、**主治医や看護訪問ステーションに連絡するのか**、救急車で**救急搬送して積極的な治療を希望するのか**などについても、あらかじめ相談しておくことが必要である。

#### 訪問看護 急変時の対応

患者は「自宅で生活しながら療養している方々」である。

したがって、訪問看護ステーションの患者（利用者）は、回復期・慢性期・終末期の状態であり、訪問看護職員も「利用者の生活に目を向けられる人、気配りができる人、生活全体を整えてあげられる人」が向いている。

急変時は、訪問先は自宅であり、高度な医療機器もなく、その場には医師もいない。したがって、治療が必要な場合は医師に自宅まで往診してもらい治療を行う。その場合に訪問看護師のスキルとして必要なのは「末梢点滴ができる」という程度である。

経管栄養や膀胱留置カテーテルの交換は時々あり、TPNにて輸液ポンプを使ったり、簡易式人工呼吸器などを使用することもあるが、使用の際には必ず医療機器メーカーの講習が初めて触る器械でも心配はない。判断に迷うときは、管理者や医師に相談する。

#### 訪問看護 回復期ケア

在宅療養となった患者にとって、自立した生活や職場復帰を目指すことが回復期ケアの主な目的である。

ADL（日常生活動作）の集中的なリハビリを行うステージの患者が看護対象となる。障害が残った場合も、できる限りの改善ができるようケアおよびサポートをする。

実際には、バイタルチェックを行い、現在の疾病、障害の状態や今後の経過について医師や他のサービス担当者や情報共有をする。また、一般的に患者のスケジュール管理は看護師が行うことが多く、他の職種と患者の間に立つ調整役を担うことが多い。

その他、患者のストレスケア、社会復帰のためのサポートなど、病気によって不安を抱えている患者に精神的に寄り添うことも重要な役割といえる。

### 訪問看護 慢性期ケア(1)

自宅で、残りの人生を病気と共生することとなった患者のケアを行うのが慢性期の訪問看護である。

看護実践の際に求められることは合併症の予防の他、口腔環境・排泄状況・皮膚の状態など全身を丁寧に見て疾患が悪化した際に早期発見できるように日々チェックし、小さな変化も見逃さない。

患者と向き合う時間が長く、小さなバイタルサインの改善や残存能力に気づくことができる立場でもあるため、気づいた点を家族や医師等に伝え、最期までより良い生き方をしてもらうためにどうすべきか周囲と一緒に考える。

喀痰吸引などの医療措置は日常的かつ継続的に必要で、完治が難しい患者を多く担当するため、家族の心のケアを行うことも役割となる。患者と家族の両方に寄り添える姿勢が必要である。

### 訪問看護 慢性期ケア(2)

訪問看護の実施は、医師の指示のもと、基本的にケアマネージャー（介護支援専門員）が中心となり、他の介護保険サービスと組み合わせて生活を整える流れである。

在宅医療に熱心なケアマネもいれば、逆に訪問看護師に丸投げする場合がある。そういった場合には、訪問看護師が利用者や家族の要望を聴きつつ、病状や介護状況を合わせてケアマネージャーに報告する。

したがって、多少は介護保険の知識を持つべきであろう。普段の状態をしっかりアセスメントでき、異常を察知できるようにする。

訪問看護は「**その人らしい生活を、その人が望む場所で送れるように看護で支える**」ことである。はじめからひとりで訪問することはなく、判断に迷った時には相談できる体制が整っている。

### 訪問看護 ターミナルケア

ターミナルとは、医師によって余命数週間から数か月と診断され、治療によって治る見込みがないと判断された終末期の患者に対して使う表現。

延命治療や心身の機能維持の治療は行わず、痛みの管理などの症状緩和、心のケアを中心とした看護ケアを行うことを指す。

残された時間を住み慣れた自宅で過ごしたいと考える患者に対して、訪問看護によるターミナルケアが行われる。訪問看護師は、利用者が残された日々を少しでもよりよく家族と過ごせるよう、サポートする役割を担う。

ターミナルケアは、他の医療施設との連携が欠かせない。まず、利用者の急変に対応するため、24時間対応の必要がある。日常的な療養上の世話やバイタルチェック、痛みなどの症状管理のほかに、利用者や家族の精神的なケアも求められる。

第106回 Aさん(65歳、男性)は、肺気腫で在宅酸素療法を受けている。ある日、Aさんの妻(70歳)から「同居している孫がインフルエンザにかかりました。今朝から夫も体が熱く、ぐったりしています」と訪問看護ステーションに電話で連絡があったため緊急訪問した。

訪問看護師が確認する項目で優先度が高いのはどれか。

1. 喀痰の性状
2. 胸痛の有無
3. 関節痛の有無
4. 経皮的動脈血酸素飽和度〈SpO<sub>2</sub>〉

第107回 Aさん(80歳、男性)は、20年前に大腸癌でストーマを造設し、現在週1回の訪問看護を利用している。訪問看護師は、訪問時にAさんから「2日前から腹痛がある」と相談を受けた。Aさんのバイタルは、体温36.4℃、呼吸数24/分、脈拍84/分、血圧138/60mmHgである。

訪問看護師がAさんの腹痛をアセスメントするための情報で、最も優先度が高いのはどれか。

1. 排便の有無
2. 身体活動量
3. 食物の摂取状況
4. ストーマ周囲の皮膚の状態

第103回 国家試験追試 午前

次の文を読み問題に答えよ。

Aさん(85歳、男)は、80歳の妻と2人で暮らしている。Aさんは、脳梗塞を発症し要介護4の認定を受けて介護療養型医療施設に入院していたが、在宅療養の強い希望があり、退院することになった。訪問看護、訪問介護および通所介護を利用することになっている。

問題1 初回訪問時に、訪問看護師はAさんの手関節、下腹部および大腿内側に赤い丘疹と小水疱を、指間には線状疹を認めた。

疾患として考えられるのはどれか。

1. 疥癬
2. 白癬
3. 伝染性紅斑
4. 単純ヘルペス



問題2 訪問看護師が妻に対して行う線状疹に関する生活指導で適切でないのはどれか。

1. 毎日室内を清掃する。
2. 治るまで来客を避ける。
3. Aさんの衣類の洗濯は妻の洗濯物と分けて行う。
4. ベッドの周囲を次亜塩素酸ナトリウム液で消毒する。

問題3 Aさんを訪問するときに訪問看護師がこの感染の媒介者とならないための対応で適切なものはどれか。

1. 訪問終了時に含嗽をする。
2. 療養者に接するときはマスクをつける。
3. 療養者に接するときはガウンを着用する。
4. 療養者に接するときはゴーグルを装着する。

第104回 Aさん(70歳、男性)は、1人で暮らしている。慢性閉塞性肺疾患のため1週前から在宅酸素療法(0.5L/分、24時間持続)が開始された。Aさんは階段の昇降時に息切れがみられる。

自宅での入浴の方法に関する訪問看護師の説明で最も適切なものはどれか。

1. 脱衣は看護師が全介助する。
2. 浴槽に入ることは禁止する。
3. 身体を洗うときはシャワーチェアを使う。
4. 入浴中は携帯用酸素ポンペを利用できない。

第107回 Aさん(65歳、女性)は、5年前に乳癌の左胸筋温存乳房切除術と左腋窩リンパ節郭清術を受けた。1年前に大腿骨転移のため日常生活動作(ADL)に一部介助が必要となり、訪問看護を利用し在宅で療養している。Aさんの左上腕内側の皮膚をつまむと健側より厚みがある。

訪問看護師がAさんに指導する左上腕のケア方法で正しいのはどれか。2つ選べ。

1. 指圧する。
2. 皮膚の露出は少なくする。
3. 保湿クリームを塗布する。
4. ナイロン製タオルで洗う。
5. アルカリ性石けんで洗淨する。

第97回 ターミナル期にある療養者の家族に対する予期的悲嘆への援助で適切なのはどれか。

1. 混乱している時は積極的に励ます。
2. 予想される身体的変化は説明しない。
3. 感情を表出することがよいと伝える。
4. 最後の別れには触れないようにする。

第101回 終末期の癌患者の在宅ケアで正しいのはどれか。2つ選べ。

1. 家族の悲嘆のケアも含まれる。
2. 訪問看護は介護保険の適用である。
3. 夜間・休日を含めた連絡体制を整える。
4. ADLが自立している患者は対象とならない。
5. 主治医は在宅療養支援診療所の医師に限られる。

第103回 Aさん(70歳、男性)は、肺癌で骨転移がある。現在、Aさんは入院中であるが、積極的な治療は望まず「家で静かに暮らしたい」と在宅療養を希望し、24時間体制の訪問看護を利用する予定である。介護者であるAさんの妻と長男夫婦は「不安はあるが本人の希望をかなえたい」と話している。

退院前に、訪問看護師が行うAさんの家族への支援で優先度が高いのはどれか。

1. 訪問介護の利用を勧める。
2. 家族全員の看取りの意思確認をする。
3. 退院後の処置を習得するよう指導する。
4. 相談にいつでも対応することを伝える。

第104回 Aさん(52歳、男性)は、妻と2人で暮らしている。妻は末期の肺癌で、今朝自宅で亡くなった。

主治医が死亡診断を行った後のAさんへの訪問看護師の対応で最も適切なのはどれか。

1. 葬儀を手配するよう勧める。
2. 医療機器は早急に片づけるよう勧める。
3. Aさんの希望に沿って、死後の処置を行う。
4. 本日中に死亡診断書を役所に提出するよう説明する。

第104回 Aさん(60歳、男性)は、1年前に膵癌と診断されて自宅で療養中である。疼痛管理はレスキューとして追加注入ができるシリンジポンプを使用し、オピオイドを持続的に皮下注射している。

訪問看護師のAさんへの疼痛管理の指導で適切なものはどれか。

1. シリンジの交換はAさんが実施する。
2. 疼痛がないときには持続的な注入をやめてもよい。
3. レスキューとしてのオピオイドの追加注入はAさんが行う。
4. レスキューとして用いるオピオイドの1回量に制限はない。

